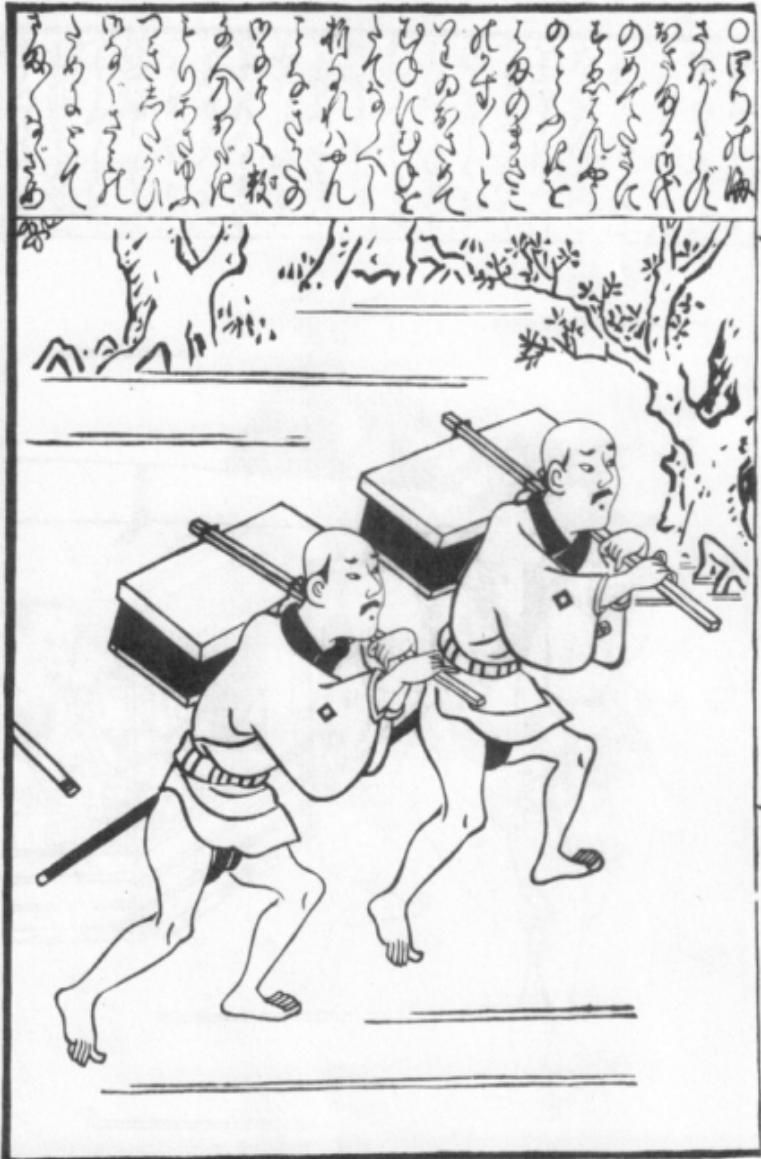


千代の友つる

爰に菱川氏の画工、一流遍満して、唐や大和のなにやかや、終に見ぬ世の友までも繪に顯した。無碍な鄙俗も是に心を浮からかして、このよき風流な上膳のなりふりは、さぞ高貴な身分の方を見るようだと、春になつた四方の山ではないが、笑みを含む輩も、もつともである。菱川の画工は世にある限りの事を見聞きして、君臣師弟、夫婦親子、善と悪との家業のそれぞれの姿を、まるで海に浸した筆にまかせたようだ。上にことわり書を加えて、上中下の品を定める事、誠に生写しのようではないか。

遍満…広く行き渡ること
無碍…はなはだしく身分が低い
鄙俗…田舎びでいること
上臍…身分の高い女性、また遊女のことを
春の山…山笑うとは俳句の春の季語



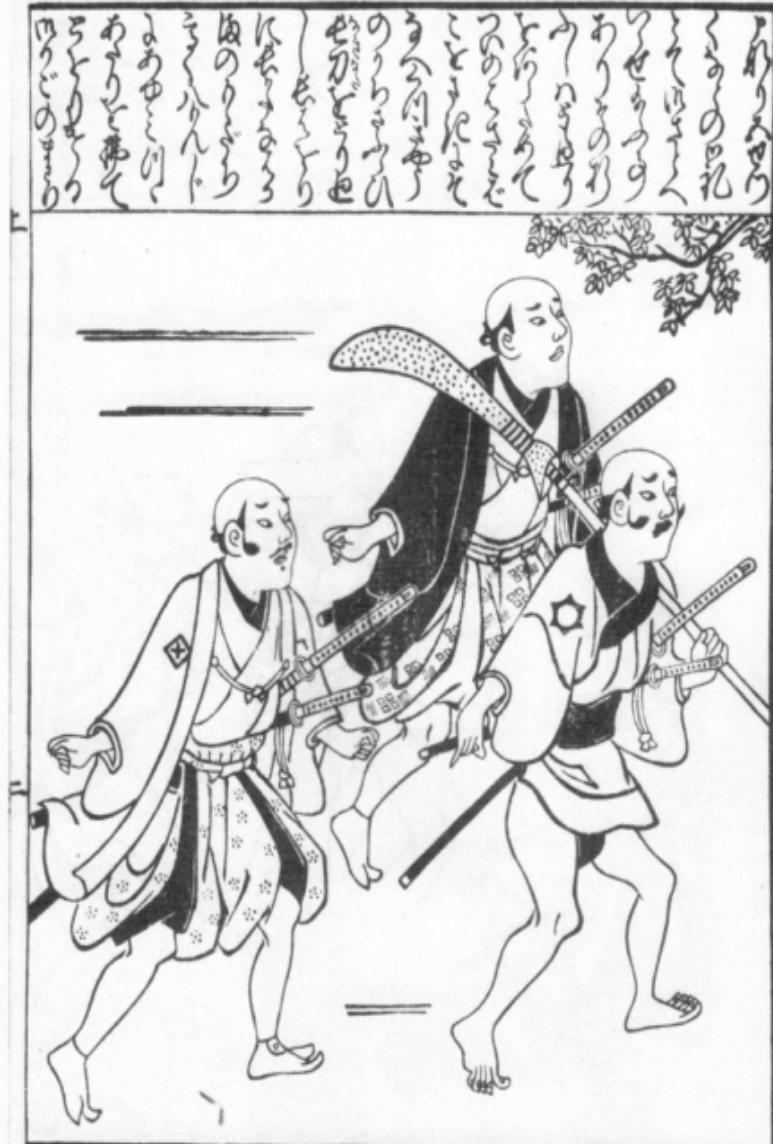
が朝夕付き従い、御な
ぐさみのためと様々
なぐさめ申す。
五節句などの御礼とし
て御里へお入りになる
事がある。その折には
供廻りを新しく整え、
対の挾箱を先に備え、
屈強な徒侍、長刀を
取り廻し、長羽織に

東山閣
古文書
多代がなにか
白文印
此農畫工匱遍漏して廣括なる
ぬを卑ひ鄙俗も乞耳心とくわがれ
内漏れうと罷うううううううう
ゆう事ううううううううう
もあもとくじやうら密ゆく筆萬川を畫せよ
あんやのうと見聞して居候師才史傳親子
者とがのむ素れどもく墨と油のまじ乃
筆にすきせぬくよきめり書と加へてよとやけの
あとゆきじ事う御うせうすんれ

長刀、袴の股立高く、
はらもんじ ももだら
八文字に歩みつつ、あ
たりを払つて通り行く。
はら まわ
御駕籠の廻り

御抱守…守役
御里…領国へ御国入り
挨箱…着替用の衣装箱、
棒を通し従者に
かつがせた
八文字…大股に足を外
側に開いて歩
く歩き方

には中小姓以上の侍
たちが、左右を取り廻し
御供する。六尺が六人
紋印を一様に着しな
がら、染手拭いで鉢巻
し、肘を曲げて駕籠を
かく。御乳の人は、衣
服を着飾り、若殿を
抱きながら、いつよに
お乗りになる。鳥毛の
槍を振り立て、左右
前後を守護しながら、
聞きためてお通りにな
る。後備えは家老らし
い年寄が、丸頭巾をか
ぶり馬に乗り、仔細ら
しく頭を振り傾けて
通つてゆく。御里へお入



りになれば、数々の珍物を整えて、御馳走するため、御持ち遊びを整えて、様々

六尺・駕籠かき
御乳・乳母

御持ち遊び：

おもちゃ。手に持つて遊ぶの意味で
おもちゃの語源

なぐさめ申す。それから御帰りと触れがあれば、あわてふためき御供をして帰つてゆく。
君臣の礼儀は、君を大切にして、忠をなせば、
君はこれを重んじて、知行を加増し与えてくださる。とにかく奉公をよく勤める侍は、
奉公の間、大分知行を増やすものだ。奉公で
きない者、虚病を使い、け暮れ騙る人は、主人に見限られて浪人して後に後悔して、昔を慕え共、帰参できるすべ



もなく、一生を暮らす輩が多い。たしなむへし、慎むべし、としか言ふことはない。

知行：幕府、大名が家臣に俸給として与えた土地
虚病：板病
帰参：一度ひまを取つた主人へ再び住える

○諸国の御大名の方の家には、御使番というものが定め置かれている。年頃も良く、器量、口上も良く、公界に精通し、何方へ使者に行かせても、遅れを取らない人を定めて使者とするものだ。常に曾我や小笠原の流派に従い、諸礼をひたすら稽古して、どんなところであっても出入なされて、ひとひねり趣向をひねるうか、などと思つてゐるものだ。折しもその時、嫁娶の寿として様々な音物を整え、贈りな



○君主一家に譲り合う
気持ちがあれば、國中に譲り合う気持ちが生まれ、短気ならば國中に乱を起こすと古人の言葉がある。ここに、慈悲第一にして、有徳な侍がいた。若年より武道を究め、度々高名を挙げて、先祖の名を上げられたが、日数に關守は置けないの例え、老の坂を越え過ぎて、八十余りにお成りになつた。公界はもう面倒だと、世を譲り、隠居して居られたが、今からは、わずかでも浮世



される使者があつた。其品々を持って出られる様子は、いかにも長々と口上を述べ、奏者に手を取らせようと思う氣色がありありと見えて、正面を見開き、馬を速めて乗りなさるこそ、仔細らしくて見事なものである。

公界：公の場所、世間
嫁娶：嫁入り
音物：贈り物、進物
奏者：取次役
仔細らしく：いかにも自分はよく心得ているといふ様子



○諸役人の頭たる人は器量、年頃、心だて、慈悲があり、分別良く物事に才覚があり、事を知り、我が身を修め人をたらさず、無欲にして功績が残ることもない。万人にそしりを受けず、褒められた人は、後に必ず大物にならない。万人にそしりをして頭をする。總じて物の頭と言うものは、まず、弓鉄砲、勘定方、具足、幕旗、足軽歩行（奉行）、諸番、皆是につかさ取る頭である。それぞれに組下に成つた人は、付き従つて敬



に永らえて、心のままに遊山でもしようと、供の者を召し連れて、ある時は寺参り、又ある時は神参りなどして暮らしなされる」と、目出度いものだ。
竹杖をすがりてつくや
翁草

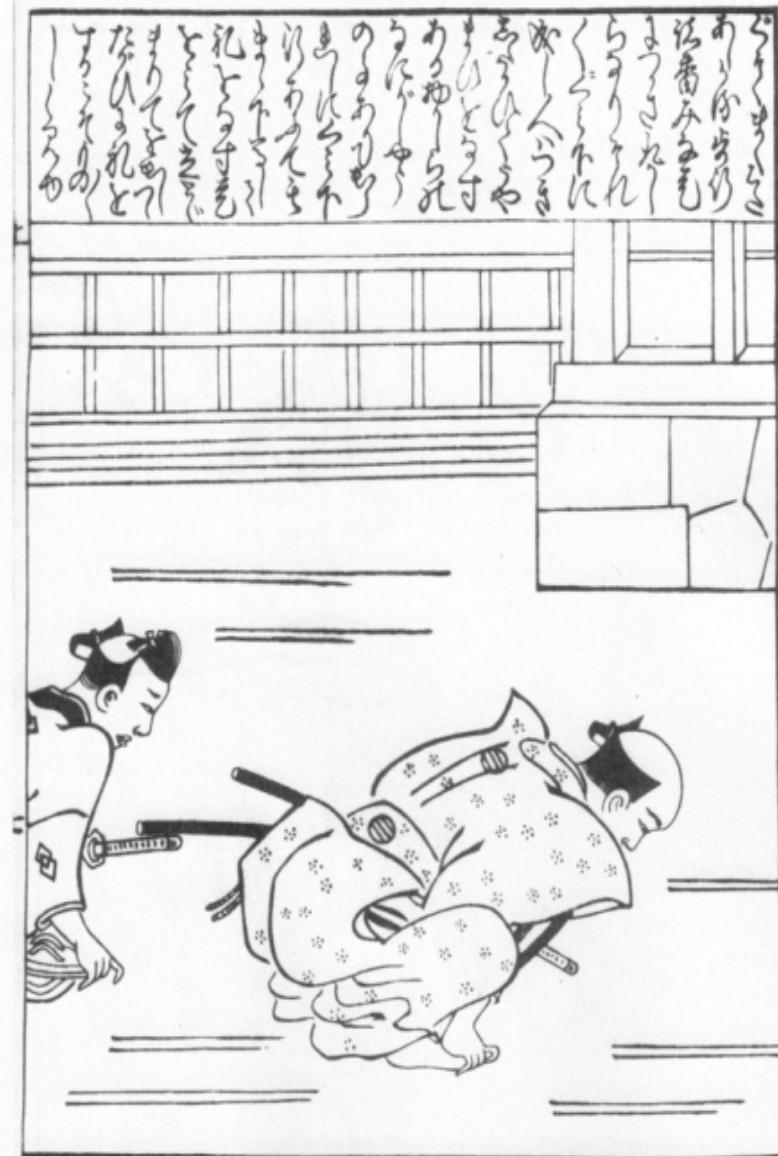


○どこの国でも、守護される御領主の若殿方が、初めて入部される時は、国元が珍しく思われて、毎日、芦狩り、川狩り、野巻き、鹿狩り、狐釣りなどして、様々な殺生をして野山を家とされるようだ。たかの鷹野などに出られる時は、三日前から餌を撒いて、諸鳥を集めさせ、手づから鷹を手に据えられる。雁、鴨などを獲物になされて、一機嫌のあまり、早飛脚をもつて、御一門方へ贈り物とする。これをいた



いをなす。ある物頭の何某所用があつて出かけた時に、組下の者が行き会つて、其ままで下馬して礼をした。頭は是を見て立ち止まり、手を出しながら、互いに礼をする。そものものしく見えるものだ。

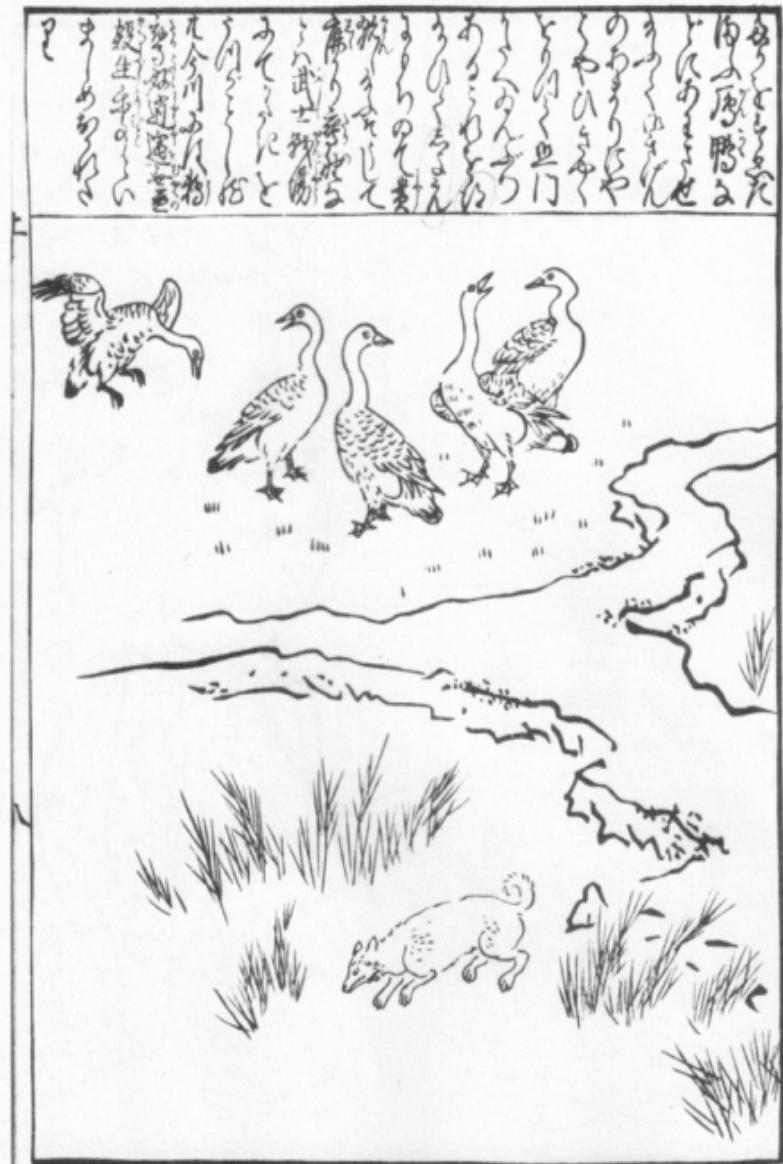
たらす…甘い言葉でたます。…非難、悪口
ものものしい：容姿態度が堂々としている、威厳がある



だいて、初獻に用いて、
賞讃される。一般的に
鹿狩り、鷹野などは、
武士が戦場で敵を討
つようなものだ。しかし
ながら、今川には、鶴
鷹好逍遙、無益殺生
樂事、と戒めておら
れる。

入部・領主が領地へ入る
こと、御国入り
鷹野…鷹狩り
初献…酒宴での最初の盃
今川…今川状。室町期の盃
武将今川了俊が弟
に書き与えた家訓
江戸期には子弟の
教訓書となる

○世の人がよく言つて
いるのは、唐土の虎は
毛を惜しむ、日本の弓
取りは名を惜しむ、と
言う。敵に会つて一戦
する時、無手では勝利
を得る事はむずかしい
と、武芸を一心に稽古
される。よい師匠に付
いて、やわら小太刀の
兵法を学ばれ、師弟、
左右に立ち分かれて、
竹刀を持って打ち合う。
受け開き、足元の差し
引き、間使い、一つとし
て兼ね合わなければ、
敵に会つて勝利を得る
事は決してないと云う。



兵法の師伝は様々にあ
る。どの伝えにも聴病
では勇敢に戦う事
きない。たしなむべき
は心である。

させば見えぬ

朝日やおのが

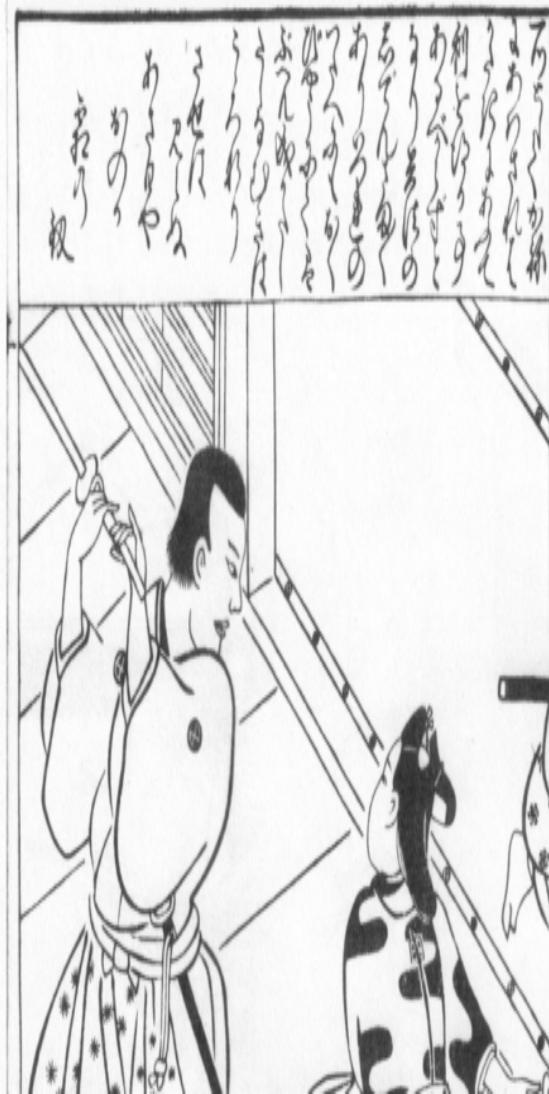
霜の錫

やわら……やおら。動作が
ゆっくりと。人に知られぬよ
うに、そりよ

○治まる御代のこんな

世に、生まれ合うのも
果報であると、弓は袋
鞆に太刀を収める三の
ご時世だが、おのずと
いたづら者も出てくる。

ならば、わや者のため
にと、槍を稽古する小
姓がいて、また長刀が
好きで習う中小姓がい
た。敵に会った時、ど
ちらが勝利を得るかと、
互いに論じていた時、中
小姓が言うには、長刀
に利がある。雲手十文
字に振り立てれば、た
とえ槍がどれほどのこと
があつても、突き手



元へ寄せる事は出来ないだろうと、自慢顔で申された。小姓は、それ

を聞いて、それなら

ば、稽古のために二人でつくから。仕合つてみたまえ、と、槍でおつとり突きかかり、手ひどく仕込めば、長刀もついには出せなかつた。

わや者…無茶苦茶をす

る人

中小姓…侍と足軽の中間に位置する下級武士

おつとり…落ち着いたし

ぐさで



○遠国の大名衆の参勤に召し連れられた小姓が、長屋住居が気づまりだと、朋輩たちと暇をいただき、弥生半ばに興を催して桜の花を見に行く。山桜は散るものだが、まことに見事な花の盛りなればこれはこれほど、手を打つて、いざ歌を詠んで短冊を付けようといつしょづつをこのように詠んだ。

桜花咲かば
まづ見んと
思ふまに
日数経にけり

○御大名の方の御小姓
衆の風は、日頃、御側
近く召し使せれる人な
ので、常に良き事のみ
を見聞なされ、下卑た
ところは無い。心だては
女郎のようである。
とりなりは尋常で、衣
服も伊達なものをして
大小なども金ののしつ
けを抜き出して差して
おられるので見事であ
る。御しんぶ係は下屋
敷などから、上屋敷へ
通われる。玉縁の縄
の締め緒が長うてきよ
ござる、の歌の節をも
歌いそうな、供の弥介



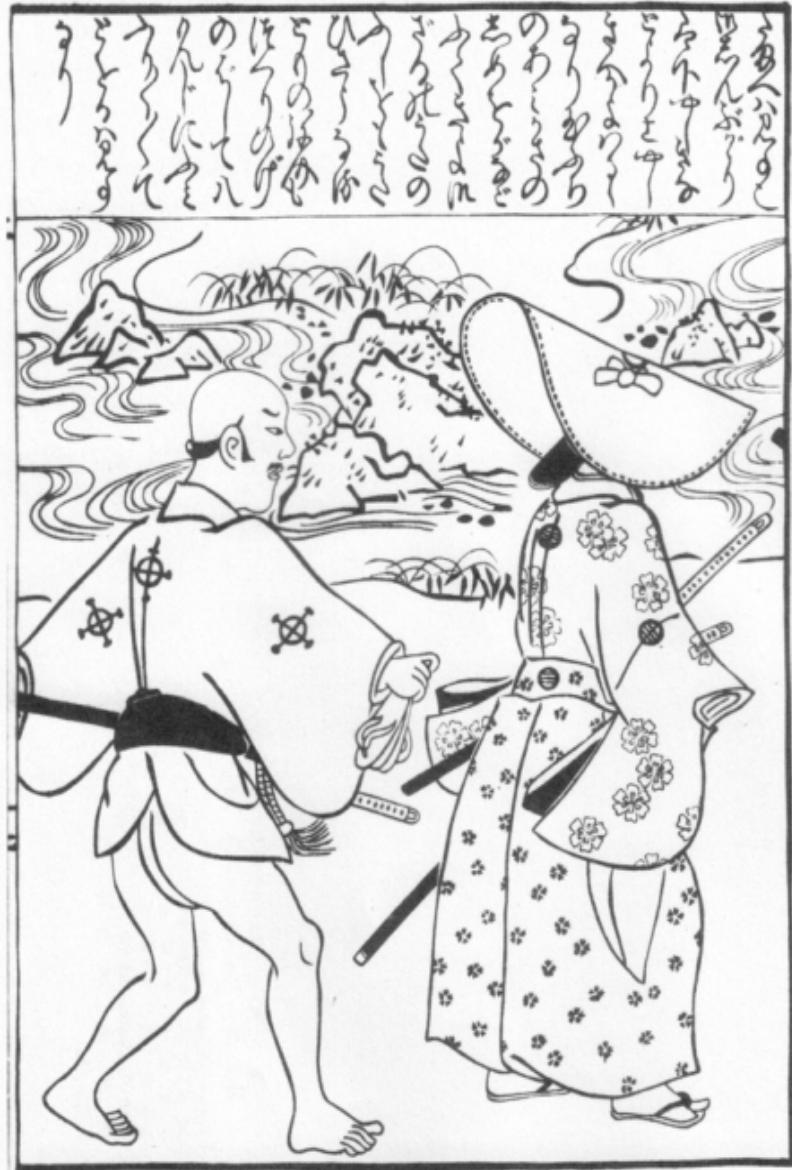
春の山里
今桜咲きなど
見えて
薄曇り
春に霞める
世の景色かな
春にのみ
年はあらなん
あらをさを
返す返すも
花を見るべく



も、作り蹠つくを伸ばして
八文字に足を踏み振り
踏み振り通るのは、見
事である。

とりなり…なりふり、
人の身なり
のしつけ：金銀類の延べ
板を刀剣の鞘
につけたもの
玉縁の編笠：

皮で美しい縁
取りをした編
笠。万治年間
主に婦人用に
流行



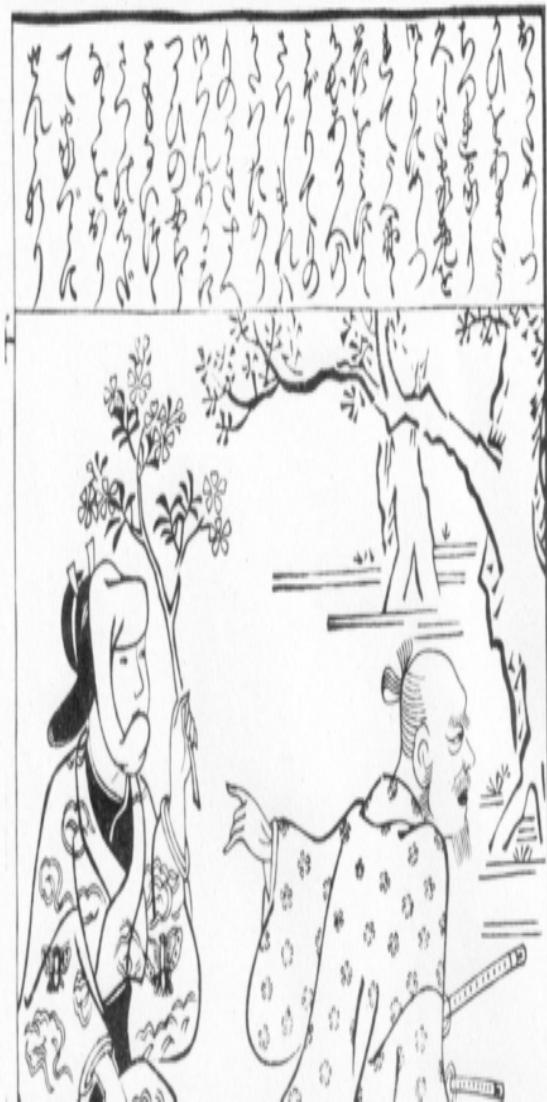
○ 弥生中旬の頃、上下
皆誰しも心こころにあら
ずと浮かれて、木陰を
求めに出かける。(二)
ぞと咲く花を、うち眺
めて、花の下から帰る
ことを忘れてしまうの
は、樽の前に酔いを勧む
る故なり、と言う事を
朗詠集と言う書物に
記してある。ある高貴
な奥方が、召使いを多
く連れて、永く仕える
家老を御供に召し連れ
て、上野の花見にお出
になつた。人がたくさん
集まり、騒がしいので、
傍らに乗り物を据え、

○奥方には、局、中居、
端の風、それぞれ分か
れて特徴がある。局は
養い君の乳の御なので
生涯、御介抱を受けて
奥方では女郎へ指図し
てある役である。上臈
様の位を借るゆえ、人
は恐れて敬う。衣服は
きらためて、物事は仔
細らしくもつたぶる。
女中の交わりでは鷺の
鳥のようで、恐れる女
中もない。中居は奥
方の仰せを受けて、そ
れぞれに申し雜ぐ役で
ある。女郎と交わりを
すると言えども、世帯



御覧なされた。召使い
の女郎を伴いながら、
桜の枝などを折つて、
家苞にすることにした。

樽(そん)…酒樽
朗詠集…和漢朗詠集。平
安中期の詩歌集
藤原公任撰
家苞…一家のみやげ



○高貴な御方の御台所
は、常に御座の間に着
き、親しみ参らせてお
られる。客人、局、女
郎、小姓、中居、端など、
玉を磨いたよう
に、召使いが、大勢、奉公
の勤めをなしている。
ある時は、三味線、琴、
貝合せ、歌かるたなど
を小姓たちにあげ
られ、御茶などをあげ
られる。夜は寝床に入
られて、灯火をかかげ、
草紙などを読ませて聞



じみた風がある。端は
仰せを聞いて、或いは
文のお使いなどに出て、
御里、御一門方へ使い
をする役である。諸事
下部の役を務めるゆえ
その風は卑しい。

乳の御：乳母、御乳の人
上膳：元の意味は膳(年
功)を積んだ高僧。
上の階級、身分の
高い婦人を指す
きたためて：整える、念
入りに吟味
する
端(はした)…はしたため
下部…雑用に使われる者
召使い



きなされ、歌を詠んだ
りして御遊びなされる。

金の屏風を引回し、金
糸線乱を身に飾られて
おられるので、あたり
も輝くばかりである。

○女は、かみより魅力
的だろうとされるのは、
見目形優れて美しく、
めると、あいさう
目元に愛嬌がある。
生まれつきは、たとえ
卑しい下部の娘であつ
ても、振袖の頃より上
つ方へ召されて寵愛な
されるものだ。彼女ら
のようなことを、女は
氏はないけれど、玉体
を伺い、玉の輿に乗る
と言うのである。しか
しながら、上つ方の娘
君とは、格別相違があ
り、下卑た風がある。
このような隠し女を名
づけて目かけと言う。



あるいは御座敷などと名付ける。いずれも遊女に近い。その昔にも、このような女を愛して、身を失う人もいたのである。

かみ：上。その昔
上の方：身分の高い人、貴人

玉体

天子

天皇

の尊称

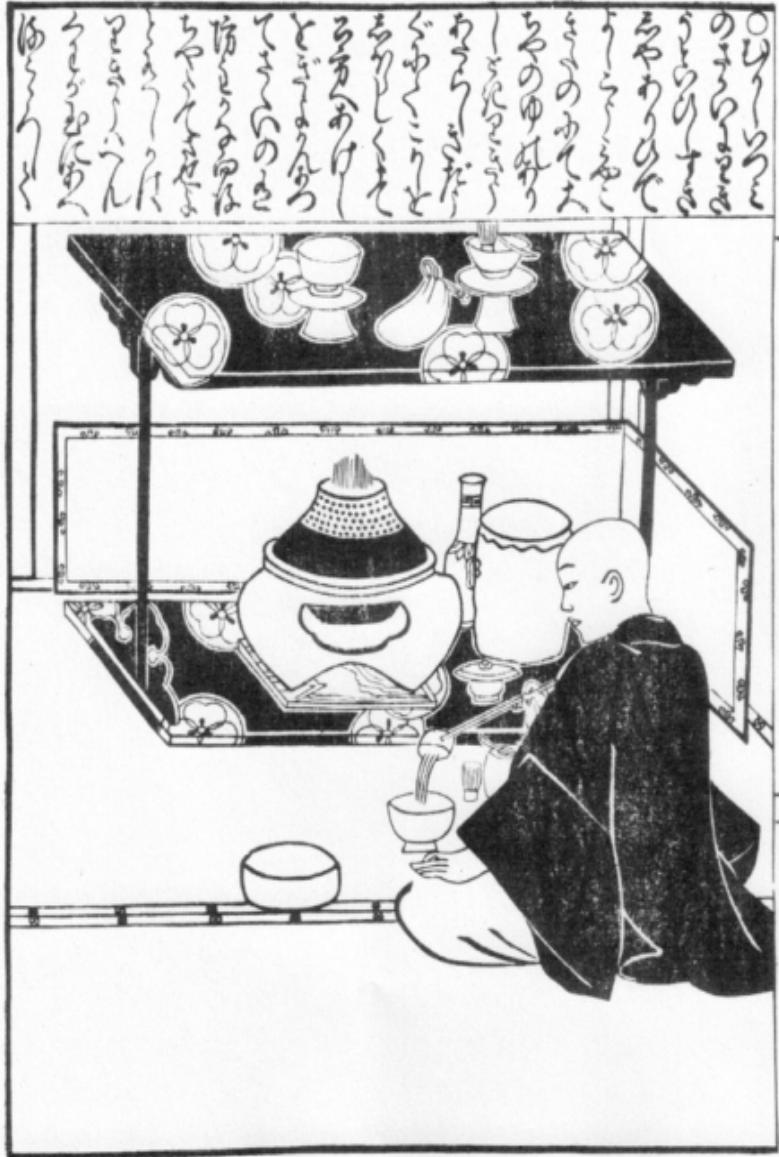
○漢学寮に博学な儒学者がいた。数卷の書袖を集めて、見ぬ世の昔の人を友とするかのようだ。ある時は四書を読んで、孔子の金言に古文を読んで、蘇子瞻、山谷、東坡、陶淵明、杜子美の心を伺う。屈原などの文を学ぶ。老莊を読んで、賢人に親しむ。五十路を過ぎて見台に向かい、講釈をされる。聖人、うち交わって聞かれる。誠に師の恩は



ありがたいものだ。朝に道を聞いたなら、夕べに死んでもよい、と皆、座を立つて、喜ばれるということだ。

四書…大学、中庸、論語、孟子の総称
山谷…北宋の詩人、黄庭堅。号は山谷道人
東坡…北宋の詩人、蘇軾、字は子瞻。東坡は号で蘇東坡とも
杜子美…唐の詩人、杜甫
陶淵明…東晋の詩人、名は潜。官を辞し帰郷、田園詩人となる
屈原…楚の詩人、憂国の政治家で、楚の将来を憂い自殺

○昔、和泉の堺に利休と言う数寄者がいた。秀吉公が都の北野において、大茶の湯があつた時、利休は新しい道具立て、こがしをしほらしく立てて公に供したのを、秀吉は御感あつて作為の有る坊主だな、向後、わしに茶を立てさせよと言われたので、利休は、下和が玉に会える心地がして、御供をして大坂に下った。日本の大名らが尊敬なされたので、今の世に、その名を残しているのである。それから金森宗



和、小堀遠州流、古田
織部流などの数寄者の
誉めが世に聞かれ、そ
れを慕つて、今時に茶
道と言つて、茶の湯を
しほらしく立て、あ
ちらこちらを徘徊する
と言うのである。

数寄者…風流人。特に茶
の湯の趣味人
こがし…米や麦を焼いて
して飲むもの
しほらしく…慎み深く
御感…貴人が感心する事
卞和…中国春秋時代の楚
の人。荊山で得た
玉の原石を王に
献上するが信じ
てもらえず、のち
文王はこれを認め
磨くと玉となつた

○人として学問するな
ら、出家は学問の内に
大きな長がある。伏羲
神農の跡を慕い、学問
を好む法師は、人の命
を助けるため、四百四
病を推し量り、療治を
して、次第に名を得て
後は知行を取つて、急
ぎ、乗り物で駆け回り、
あちこちへ発向する。
頗もしい限りである。
交わつて能のは、医者、
智者、福者である。
人がいた。よい仲酌
を頼んで、大医を招い
て脈をお願いする。



乗り物を速めて案内をする。待ち受けていた事なので、亭主は走り出で、ありがたい気持ちを申し述べて、案内して、家の内へ入つていつた。

伏羲・神農：

中国古代の神話上の帝王、三皇。
神農は百草をなめ効能を確かめたと
いう医療の神

人類の疾病の総称。
地水火風の四大調和が崩れると各百
一の病が生じる

仲酌…なこうど、仲介者

○武家牢人にには上中下の品がある。上の牢人と申すは、先祖に數度戦場にて手柄をし、系図正敷、名を得た人。大分の先知が不足して主人より暇をとり、牢人されても、方々より貢が多く、生活には不足は無い。中の牢人と申すは、中小姓以上の御近習を勤めなされ、俄に花が尽き、牢人なされるが、先知のゆいたてが無いので、知行も望まず、身代を望む人で、衣服は美々しいけれどもつたない。



○渡り侍、徒士若党の風は、中小姓以上の奉公人衆とは格別の風である。背は極めて高く、器量骨柄、人物にして、口上も残る所もなく、供廻りの折には、長羽織に裏付けの袴を股立に取つて、八文字に踏み歩く人。ものものしくて見事である。

下の牢人さうじんと申すのは、
身分の軽い役人わきにんなどを
勤めて、私欲ゆえ扶持てはな
を手放すことになるた
め、先主を名乗る事は
ならず。長々ながながとなぐれ
いて尾羽おほを枯らす輩。
垢あかがついた衣服いふくで世間
に暮くらしている。見苦しい
姿すがたである。



暇を取り、まかり出で
きたなどと言い、それ
から新しい主人を求める
ため、あちらこちら
に行き、お目見えの首
尾を求めるのである。

渡り侍…決まつた主人を
持たず、年季を
限り奉公をする
股立…椅の腰部の両側面
をつまみ上げ、帶面
にはさみ、動作し
やすいようにする
事を股立を取る
と言う
ものらしい…
重々しく威儀がある
首尾…始めから終わりまで、事の成り行き
結果



ちよの友つ

此下の巻には、下部、田夫、賤の男などの事を書著した。ありとあらゆる仕事の技があれども、武藏野の広い營みの、静かな御

座席の楽しみにもなればと、上中下の三品に分けて、要童の一葉から霜雪の降り積もる老の技まで、書印でこれを下とするだけである。

田夫…農夫、田舎者
賤の男…身分の低い男
要童…赤子、乳飲み子
一葉…人間の幼少の頃

○雨風が枝を鳴らさない、目出度いの世の中であれば、五穀成就して、早くも季節は秋になれば、一粒万倍の稻を刈ろうと、鎌を振り傾けて、野に出て田を刈る。昔、天智天皇の御製に、秋の田の刈穂の庵の苦をあらみ我衣手は露に濡れつつの歌のように、朝露を受けて田を刈り、牛馬につけて、自分の家に帰るのである。里は荒れて恨みても月やあらぬと



ちよ乃友

じよ乃友は卷下部に於て田夫の事と書り、又は田舎者の事と書り、又は賤の男の事と書り、又は要童の事と書り、又は一葉の事と書り、又は霜雪の事と書り、又は老の技の事と書り、又は下

誰浅茅生の
だれあさじゅう
衣打つらん
いづもる
秋風に
あきかぜに
萎るる野辺の
しおのべ

○五月雨を待つて田を植える事は、結夏水と言つて、天水の良い頃合を待つて植えるものだ。が、五穀を作る人であれば、ある人が俳諧の発句に作つたように、蓬萊の田作りや君の國宝、と言つものである。昔、堯舜、我朝の延喜の御代には、我田を人の田と言つて争つた。今は引き替えて、人の田を我が物と言つて争う。耕作仕付けるのは一粒万倍の寿とて、昼の糧に酒などを

一粒万倍…
一粒の種から万倍にも実る稲穂から、わずかから大きく成長するたゞえ
御製：天皇作の和歌
苦：荒く編んだムシロ
衣手：袖
里は荒れて…
秋風に…
古今和歌集に載る
九条良経の歌。新
歌。新古今和歌集
中務卿具平親王の

花よりも
虫の音いたく
潤れにけるかな



持つて行くのである。

くわ代の

くわで来れば

星川の

朝げは過ぬ

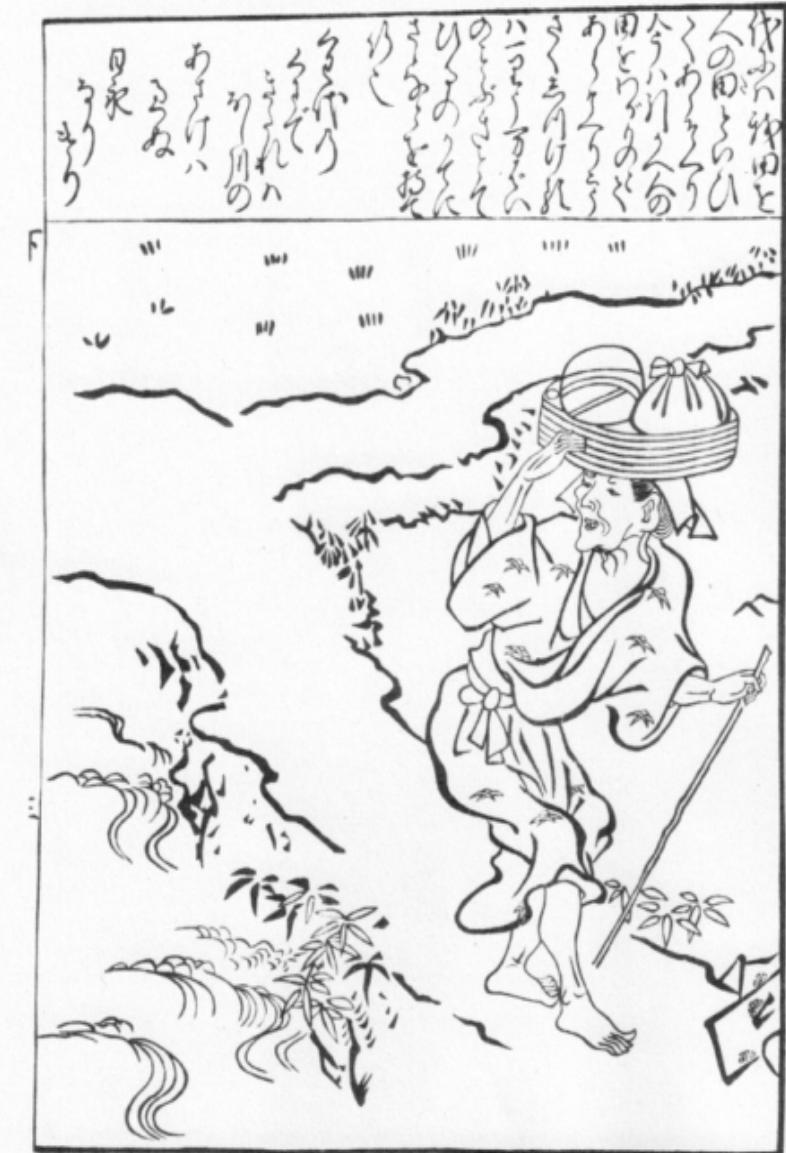
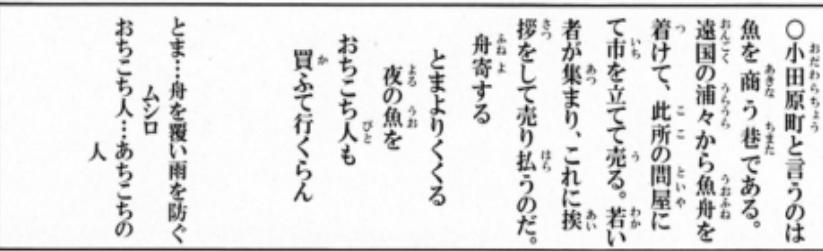
日永なりけり

結夏：夏安吾の初日、旧曆四月十六日

堯舜：中国上代の模範的な二人の帝王、堯

と舜。治世の模範とされた

延喜：醍醐天皇治世の時代。模範の治世



○ここは本町石町と

言つて、異国より渡つた。

呉服物を売る所である。

此所の商人はその恰好

を嗜み、袴を着し、

朝に屋敷へ通い、夕べ

に家に帰つて、その日

帳簿をあらためる。

売りえしは

人をはりぬきの

小袖哉

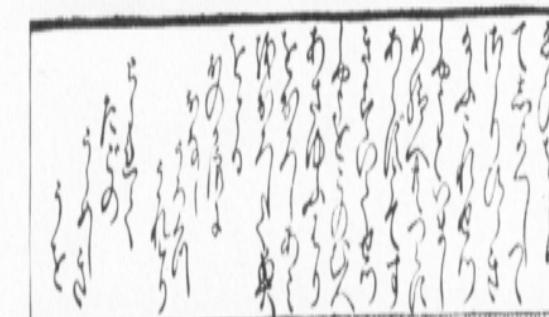
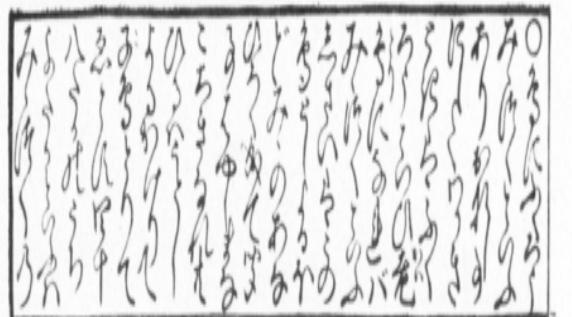
○昔、近江の水海(湖)に釣りを垂れる老人がいた。翁はどのような人で、釣りを垂れなさると問う人がいた。答えて申すには、我はこの海の主であると申される。この海の主とは誰であるか、と言うと白毘大明神であると言ふ。昔は神も釣りを垂れ、西宮の恵比寿は鯛を釣り、神の祖師は海老を取つて食しつつ、悟りを開かれる。これを殺生と戒められるけれども、罪では無いとして、好き過ぎて



○鳥にふくろう、みみづくと言う鳥がある。
同じ事であり、若い時はふくろうと言ひ、老鳥になればみみづくと
言う。理由は、この鳥年寄るほどに耳の穴が広く成て、聞く事が早い。
眼は大きいけれど、星は疎い。夜陰つてから小鳥を取つて餌とする。
四十八鷹の内、夜鷹と云うのはみみづくの事である。山中の茂つた林に宿る。此鳥を捕うとする時は、鳴る音無いように歩み寄つて、小鳥を持ってさえずら

殺生を好む人は、朝夕鉤を下ろし、網を下ろして魚を取るのである。
己が浪に
同じうろく
うかれけり
とられて田子のうらめしき魚

白蛇大明神：
琵琶湖西岸に鎮座
祭神は猿田彦神。
謡曲「白蛇」で知られる



せれば、おとりにかかる
て捕らえられるのだ。

愛発山

高けの雲に

成ぬれば

おとりにかかる

口のつたなさ

四十八鷹…鷹の種類は
四十八ある

と言われた。

愛發山：福井敦賀市にある山。奈良時代には愛發閣があつた。

○達磨尊者の跡に統いて六租がある。その中に尺八を吹いて悟りなされた祖師がある。人を仏道に勧め入れんと、尺八を吹いて弘通なされるので、どのような所へ托鉢にお出でなされても無言で、案内もなく、尺八を吹かれる。今それを学んで、居士の姿で白い前垂を巻き、熊谷笠を深々と被り、町々の角に立つて尺八を吹き、勧進をする所に、興にまかせて、鶴の巣籠り、千代に八千代の竹の節、れれつりより



つの一節を、いかにもおもしろく吹くのである。

明けて今朝

唐土までも

行く春の

都をのみと

急ぐ虚無僧

弘通…ぐつう。仏教を広める事

虚無僧…こむそう。普化

宗の有髪の僧。

尺八を吹いて、

諸国を行脚、開

西では京都妙安

寺、関東では下

総小金の一月寺

に属した。



○この所は繁盛の地であれば、軒に軒を並べつつ、諸職人、諸商人が店を並べて商いをする所である。先第一に、けんりんが膏薬にかぶと膏薬、小笠原膏薬、腫物、切傷、なんでもよく効くいばらきなどを円帽子に金看板、藤の丸の暖簾、療治交じりに商うのである。さて次は、ひせい香の髪梳油、伽羅の油などをかもじに塗て品を見せ、ゆいたてをして売る



ことで、どんな急ぎの
使いも、わざくれと思
いながら、此所で立ち
ゆいたて…言い立て、主張
わざくれ…たわむれ、自
嘲いて買わない者はない
のである。

かもじ…女房言葉で髪の
こと。そえ髪
伽羅の油…江戸前期、京
室町の隣の久
吉が売り出し
た鬚付け油

○傾城の大寄と称して
あけやさしきとひろ
揚屋の座敷を取り広げ
て、友達が寄り集まつて
一座して傾城を呼ぶ事
があった。慣れぬ傾城
たちも、三味線、引歌、
淨瑠璃、座配比べ、客
あしらい、伽羅比べ、酒
ぶりなどを互いに磨き、
客の馳走をする事こそ
晴れがましき有様であ
る。買い手の方は、太鼓
持ち座頭を引連れて、
誰々の和子様らしい風
をよそおい、恥らしく
手を打ち、宿屋のかの字
遣り手、禿に万金丹を



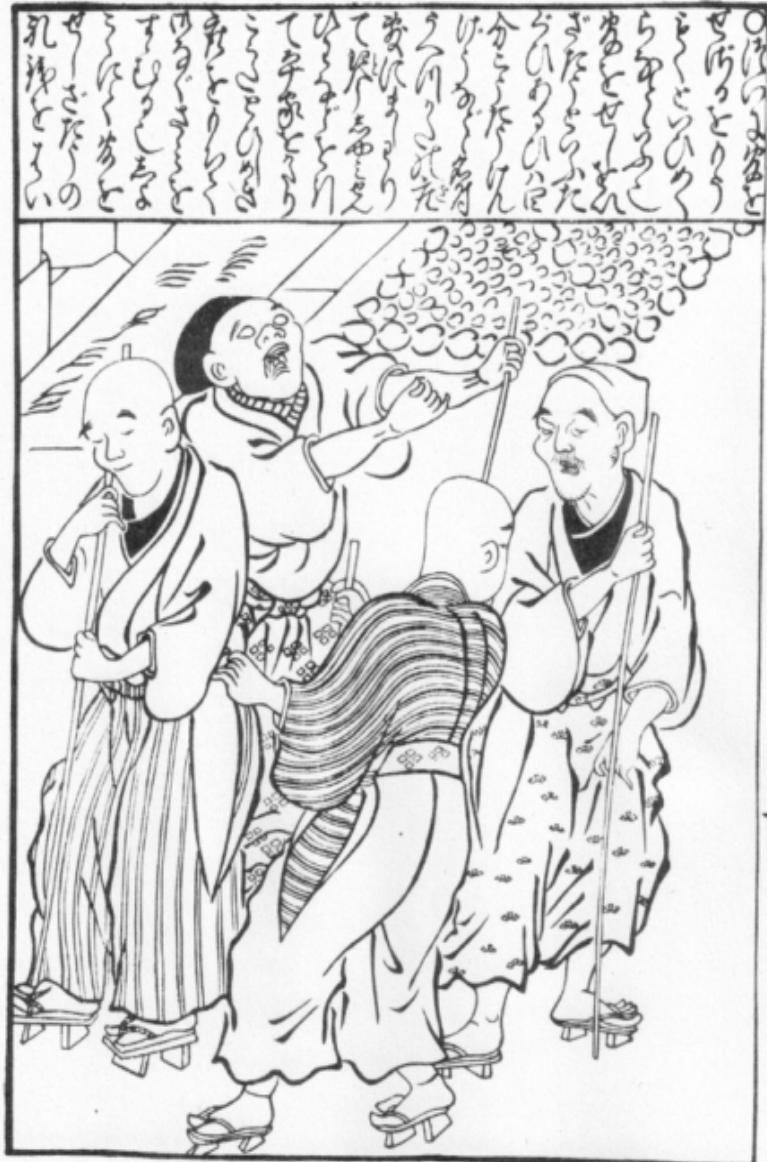
飲ませれば、思うままに回ること、速き川に仕掛けた水車より回るものだ。

傾城…遊女。美女が色香で城や国を傾け滅ぼすという意味
大寄…大勢の遊女や芸人を一ヶ所に集めて遊興する事
引歌…古歌を自分の歌に引用する事と
かの字…娼妓、遊女
遣り手…遊女を取り仕切り方切り回す
老女
禿…遊女見習いの童女
万金丹…一分金の異称

○狂言と言うのは、昔より有つて、驚きようこやとて両家が争つて技をなすのを、能狂言と言つて、四座の能太夫と交わつて、寿として翁を渡す時、三番叟を踏み、鉛を振つて、神慮をすししめるのだ。
狂言をするのに、一千石の松にこそ、千歳を祝う後までも、その名は朽ちせることはない
と、押し返し御代を祝うのである。一世一代と言う勧進狂言がある。世人これを喜び、このような時節に生ま



○終生、官につかない者を盲目と言い、めくらなどと言う。官につくを以つて、座頭と言ふ類、或いは四分勾当検校などと名付ける。身分の高い人の座敷に交わり、琴、三味線、琵琶などを引いて、平家物語を語り、小唄を歌い、座をもたせて、なぐさみを勧めるのである。諸国では官についた座頭の礼錢を配分して受け取る。これを勵みとする事を配当を取ると言うのである。此盲目、瞽女の類は官につ



鷺…狂言の一派。幕府お抱え流派で隆盛したが、明治に断絶。三番叟…能楽で祝言の式三番の三番目に舞う祝儀の舞。宇治の晒…狂言歌謡のひとう。



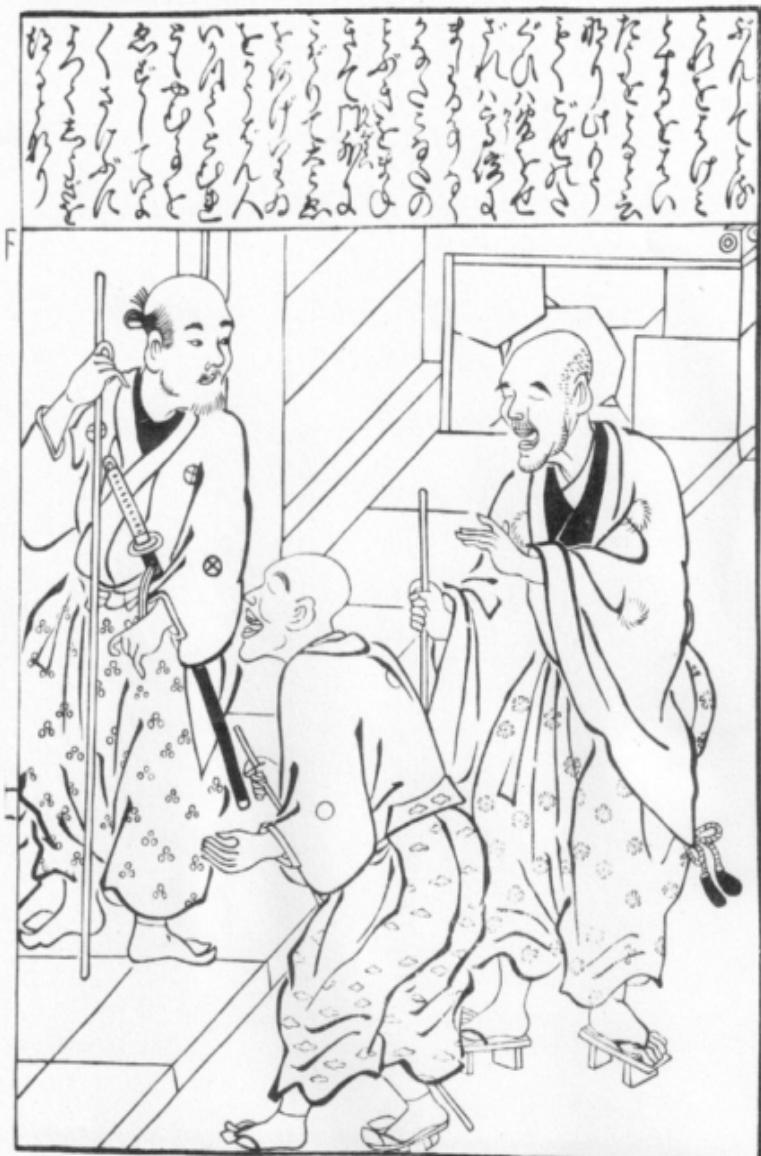
かないで、高位の人に
交わる事もなく、あち
らこちらの寿を探し
門外に集まつて、大声
を上げ、祝いを乞う。

番人が怒つて、止めても
叫ぶので、根負けして、
祝儀を得ることになる
のである。

勾当：盲人の官名。検校
の下で座頭の上
検校：盲人の最上級の官
名。専用の頭巾、
衣服、杖の所持が
許された

瞽女：三昧線、唄で錢を
乞う盲人の女

○世間の話に、百間あ
れば共過と言ふ言葉が
ある。工商の家に生を
受けて、その道に疎け
れば貧しく暮らす事に
なる。柄鏡磨と言うのは、
主人は鏡のような
ものだと言うように、
よく向かえは素直に
映る。悪く向かえは悪
く映る事を鍛錬して、
表を見てしかかれども
その道に達する事ので
きない者は、細工下手た
にして一生を貧しく送
るのを恨んで、鏡磨は
このように言った。
寒き夜は



鏡のなりに

まるねかな

稼げどついに

もたぬ水かね

と詠む事こそおかしい

ものだ。帯半襟売り、

灯心たがかけ、いすれ

もそれぞれの所作は、

車しい技である。世の中

になぞらえて、知つた方

がよい。

百間：百間長屋

共過：多くの者が互に

持ちつ持たれつ生

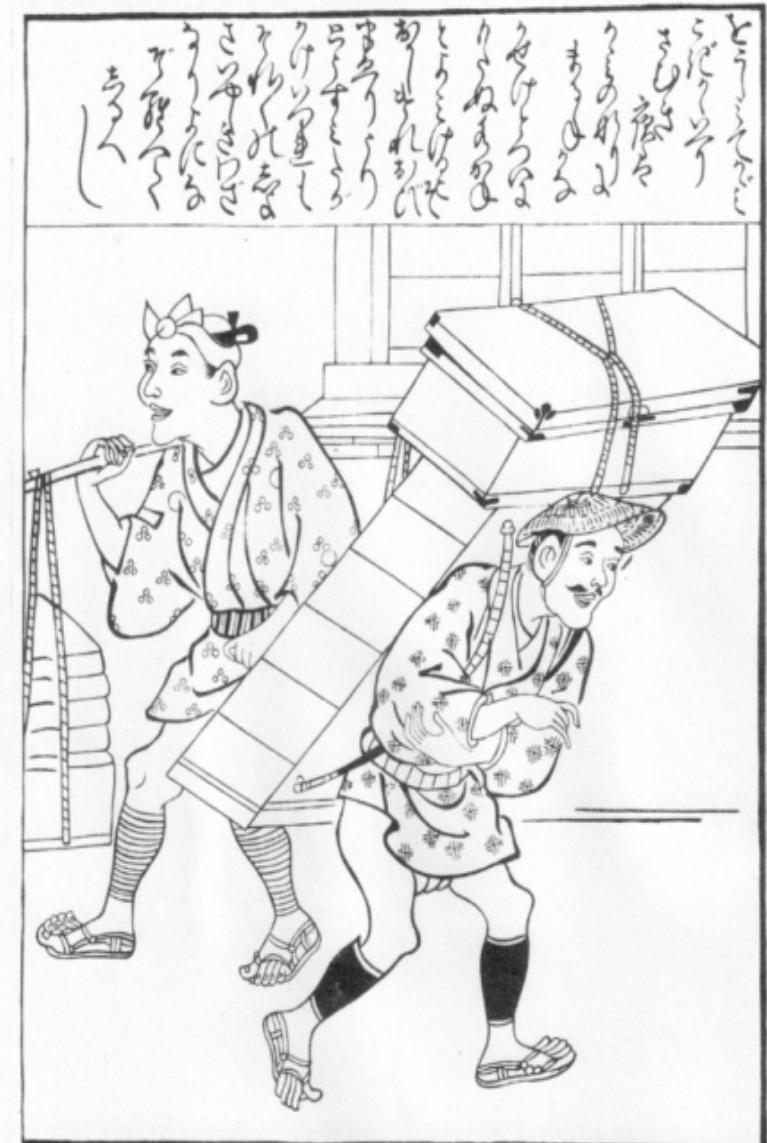
活すること。

半襟：掛襟の一種、男女

夏冬物用がある。

灯心：油に浸し火を灯す

ひも状のもの。



天和二壬戌歳
正月吉日

松會開刊

天和二壬戌歳
正月吉日

松會開刊